

下総国関宿城下町に関する歴史地理学的研究

伊藤 寿和

I はじめに

本稿は、古河公方の有力な宿老・奉公衆であった梁田氏によって建設され、後北条によって整備された関宿城の戦国期城下町を事例として、若干の復原と検討を試みるものである。

関宿の地は、中世東国の中央における水陸要衝の地である。旧利根川水系と旧常陸川水系が接する地であり、関宿城は、小金城から栗橋城を経て、古河城へ至る間に位置する要の城でもある。

関宿および関宿城下町に関する主要な論点は、以下の2点に集約されよう。まず、第一の論点は、戦国時代において、旧利根川水系と旧常陸川水系が、関宿の地で繋がっており、内陸水運がすでにおこなわれていたか否かである。この点に関しては、未だ決着がついてはおらず、両水系がすでに繋がっており、ある程度内陸水運がおこなわれていたと理解している市村高男氏をはじめとする論者¹⁾と、未だ両水系は繋がっておらず、たとえ繋がっているとしても湿地の間を繋ぐ程度のものであろうと理解する論者²⁾に二分されている。

第二の論点は、中世東国の中央に位置し、北条氏が「関宿城を手に入れることは、一国を手に入れるに等しい」と述べた、関宿における戦国期城下町の復原が進んでいないことである。近年、新井浩文氏が精力的な復原を進めて一連の研究³⁾を発表し、長塚孝氏も関宿城下町の古河公方政権下における政治的な位置と城下町の構造にも言及しているが⁴⁾、関連史料の少なさもあり、隔靴搔痒の感は否めない。確かに、関宿の戦国期城下町に関する具体的な関連史料がすこぶる少ないのは事実であるが、現地調査を踏まえた新たな解釈と理解はなお可能であると判断される。

本稿では、市村氏・阿部浩一氏をはじめとする関宿の地における旧利根川水系と旧常陸川水系の連絡と内陸水運の有無に関する諸研究と、新井氏・長塚氏をはじめとする関宿の戦国期城下町に関する復原、さらに、梁田氏とその家臣団に関する佐藤博信氏の研究⁵⁾、梁田氏の旧居とも想定されている水海城に関する内山俊身氏の研究⁶⁾などに多くを学びつつ、若干の歴史地理学的な復原と検討を試みるものである。なお、上記の二つの論点は、個別に論じられるものではなく、常に連動しているものであるため、以下の論述と復原においても、連動して論じてゆくこととした。

現地調査は現在も継続中であり、本稿の内容も中間報告の域を出るものではない。今後の調査の進展に伴って、若干の修正を必要とするものであることは多言を要さない。

Ⅱ 近世前期の関宿城下町の復原

Ⅱ－１ 『正保城絵図』に描かれた「利根古河」

近世前期の関宿城下町を研究する場合、定点となすべきは（独）国立公文書館の内閣文庫に所蔵されており、正保国絵図と共に幕府に提出された『正保城絵図』である。関宿城に関しては「世喜宿城絵図」と題されて原本が残されている。原本の大きさは、南北2m16cm×東西3m15cmである。図中に「牧野佐渡守」と明記されており、関宿藩主牧野氏八代の牧野親成の在任中である正保4年（1647）から明暦元年（1655）の間に作成された関宿城の絵図であることが判明する（図1）。

この『正保城絵図』でもっとも留意すべきは、すでに新井氏が指摘しているように⁷⁾、二之丸と三之丸の間を隔てる堀の中に、次のような朱書きがなされていることである。すなわち、堀を渡る道の北側に「利根古河 長六十五間 広式拾五間 深三間」、南側に「長サ四拾四間 広式拾五間 深三間半 利根古河」と明記されており、この堀が近世前期に現在流れている利根川以前の「利根古河」であると認識されていたことが重要である。さらに、本丸の北側を流れる現在の利根川の南側に、その利根川より少しばかり細い河川が描かれており、その河川に「利根古川 広五拾間 古河常水なし」と明記されている。この両者の朱書きを勘案した場合、少なくとも近世前期においては、現在の権現堂川から逆川をへて、関宿城をぐるりと半円形に取り囲んで、防御している感を抱かせる現在の利根川のイメージが、戦国末から近世初期本来のものではないことが判明する。

したがって、中世末から近世初期の利根川は、関宿城の西側と北側を流れて城を守っていた訳ではなく、城の南側を流れていたのである。新井氏は、この利根古河の朱書きを確認した上で、関宿城の城内を流れていた、二之丸と三之丸の間を流れていた利根古河の場において、内陸水運の検査（舟役実施）がなされていたことを想定している。

問題は、この朱書きされた利根古河が、戦国末期あるいは近世初頭のどの時期に、どの領主によって掘られたかによって、利根古河の評価が大きく変わるものであると考えられる。ここで注目すべき伝承は、関宿の城下町のひとつを構成する台町の組頭や名主を勤めていた横田家所蔵の寛政3年（1791）の『横田所左衛門家財録』⁸⁾の中に、「往古利根川ト唱、(中略)、天文年中関宿御城脇字檜山下疎通、天正年前中利根川疎通与申伝候也」との、当時の貴重な伝承が記録されている。この伝承は、単なるいち伝承として片付けることのできない価値を有していると判断される。

天文年中（1532～1555）に古利根川が掘削されたと伝承されていた関宿城の脇の「字檜山」は、現在も、「檜山」の小字名として現存している。その場所は、江戸時代の関宿城内の東南にあたる「三の丸」から「発端曲輪」の南辺に相当する。すなわち、上記の『正保城絵図』に描かれている二の丸と三の丸の間をかつて流れていた朱書きの「利根古河」の位置とほぼ一致しているのである。

また、野田村の茂木佐平治家文書の『江戸川御掘割之節上花輪村外壺ケ村手扣写書上』⁹⁾にも、「天文十丙午年、新川掘今者古川といふなり、」との、関宿から離れた野田村での伝承を書き残し

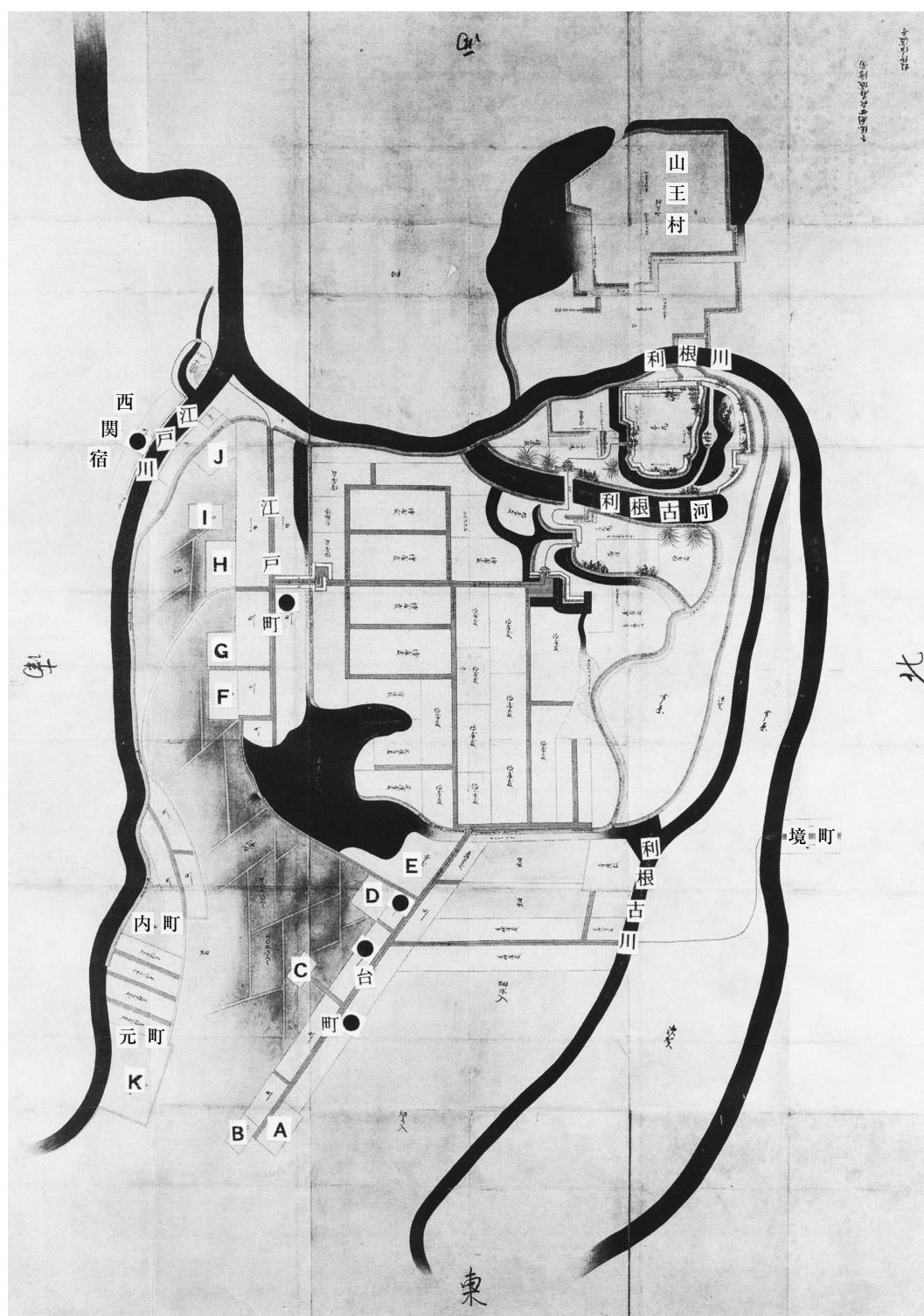


図1 『正保城絵図』に描かれた関宿城下の町（A～Kは寺屋敷、●は主な町人頭）
 （「利根古河」・「利根古川」・「利根川」・「山王村」・「江戸川」のみ原図に記載。他は筆者が論述のために付記。）

ている。天文10年（1541）に新たに掘削された河川を庄内古川と理解することもひとつの解釈ではあるが、上記の『横田所左衛門家財録』に記載された「天文年中関宿御城脇字栖山下疎通、」との関宿城下の台町の伝承と、関宿城下を掘通す利根川掘削の同一の伝承が、野田村や東金野井村をはじめとして、利根川・江戸川筋の複数の村々においても伝えられていたことは重要であると判断される。

旧利根川水系と旧常陸河水系とを繋ぐ関宿城下の利根川が、天文年中（1532～1555）に梁田氏によって掘られたとする、現在では途切れてしまった貴重な伝承が、少なくとも、近世の寛政年間までは地元に伝承として伝わっていたことが判明する。この貴重な伝承によれば、先の正保の城絵図に描かれて、「利根古河」と朱書きされた中世の利根川は、天文年中（1532～1555）に、当時の関宿城主であった梁田氏によって掘られ（拡張・修復の意味も含む）、城の守りとして利用されつつ、旧常陸川水系と繋がっており、銚子・佐原・布川など旧常陸川水系の中下流に位置する湊から、塩や穀物などの諸物資を積んで航行し、さらに上流に位置する栗橋城や古河城方面へと向かう内陸水運の諸船に対して検査をおこない、川手などの舟役を課していた可能性も十分に考察の射程内に入ってくることとなろう。

この伝承はまた、正保の城絵図に描かれた利根古河に通水するために、南西から流れ下る権現堂川と、城下の利根古河まで至る、いわゆる逆川の南域がすでに存在し、「利根河」と呼ばれて、確かに流れていたことを傍証していよう。ただし、関宿城の西側を守りつつ流れる逆川の北域が、どの時期に掘られたのかという問題点はなお残されている。この点は、後に関連史料を示して推測したい。

一見、荒唐無稽とも思える近世中期末の横田家の伝承（記録）ではあるが、以下に示す周知の内陸水運に関する諸史料を再読した場合、梁田氏によって天文年中（1532～1555）に関宿城の東側を流れる利根古河が掘削（拡張・修復）され、本格的な旧利根川水系と旧常陸川水系が繋がり、両水系間を繋ぐ内陸水運の本格的な活動と舟役の賦課が開始されていたと理解することも、十分可能性が残されていると判断される。

史料1 天正6年（1578） 豊島貞継印判状

於当津に、年中穀船老艘、塩船貳艘、以上三艘令免許了、

一札如件、

天正六年

豊島

霜月廿一日

貞継（花押）

福田民部少輔殿

この文書¹⁰⁾は、中利根川に沿う下総国布川の城主であった豊島貞継が、古河公方の御用商人であった豪商・福田氏に対して、布川津における穀船1艘と塩船2艘の通船を許可した過書である。この史料は、すでに市村氏によって紹介・検討がなされ、関宿城下において旧利根川水系と旧常陸川水系を繋ぐ水流が存在し、布川と古河の間に活発な船の往来が存在していたことを証する史料と理解されている。

中利根川に位置する布川城主の豊島氏が、水系の異なる旧利根川水系の古河の豪商・福田氏に商船の過書を発行している史実を勘案した場合、上で述べた天文年中（1532～1555）に関宿城下の利根川が梁田氏によって掘られとの伝承は、福田氏のような商船による活発な活動の存在を傍証するものであると判断されよう。

史料2 弘治4年（1558）足利義氏印判状写

覚

（中略）

- 一 利根川舟路并古河へ通商人、永不可有横合、但於関宿自然自前々改沙汰舟役之儀者、可被仰付事、
- 一 梁田知行之内并於古河舟役可申付儀、尤被任前々筋目事、（中略）

以上

弘治四年六月十九日

朱印有之

梁田中務太輔殿

この文書¹¹⁾は、古河公方の北条義氏が、関宿城主であった梁田晴助に対して、関宿城の開け渡しを要求し、その代償として古河城との交換を申し出た際の印判状の写しである。多くの論者によってすでに引用・検討されているこの印判状から判明することは、利根川水系における梁田氏の権益の強さであり、古河公方である足利義氏でさえも、利根川水系に対して有していた梁田氏の内陸水運の既得権益を認めざるを得なかった現実が認められる。移転先の古河城下の舟役はもとより、北条氏が新たに入城する関宿城下の舟役においても、従来の既得権益の一部を梁田氏は得ていたのである。

古河公方も崩し得なかった利根川水系における梁田氏の内陸水運に対する既得権益の強さは、梁田氏が単に旧利根川水系と旧常陸川水系が接する水陸要衝の関宿の地を押さえただけではなく、天文年中（1532～1555）に、自らの手で両水系を繋ぐ「利根古河」を掘り繋げ、内陸水運の実権を握っていた事実を、古河公方も認めざるを得なかったからであると想定されよう。

さらに、小笠原長和氏がすでに指摘されているように、武蔵国忍城（埼玉県行田市）の城主であった松平家忠は、文禄元年（1592）の2月19日に忍城を出て、新領地である小見川（千葉県香取市小見川）に向かうに際して、新郷（埼玉県羽生市上新郷）から乗船し、矢作（茨城県坂東市矢作）～金井津（茨城県稲敷郡河内町金江津）～上代（千葉県香取郡東庄町窪野谷の神代）に着いており、旧利根川水系から旧常陸川水系を川船で下っていることが推定されている¹²⁾。天文年中（1532～1555）における関宿城下の利根川掘削の伝承を踏まえれば、何ら不都合のない通船の記載（『家忠日記』）と認められよう。

Ⅱ-2 『正保国絵図』に描かれた関宿城下町

Ⅱ-2-1 台宿（台町）

『正保国絵図』には、近世初頭の城下町も詳細に描かれている。関宿城下町の特徴は、一ヶ所に

まとまって建設されておらず、数ヶ所に分散していることである。

まず、関宿城の搦手門から東南へと延びる洪積台地上に「台町」が形成されている。台町は中世以来の城下町（町人町）であり、中世の文書では「台宿」と記載されている。ほぼ一直線に延びる台町の町並みは、街道の両側に短冊型の町屋が建ち並び、その間に中世以来の由緒を有する寺社が建立されている。以下、この台町（台宿）形成の時期を想定することが可能な寺院の建立年代と、その由緒の一端を順次述べておきたい。

A 町外れの東南に位置する実相寺（写真1）は、日蓮宗の寺院で、南北朝末以来、梁田氏の本拠であった水海の地に、応永16年（1409）に日英上人によって開山・創建され、梁田氏の関宿進出に伴って、永禄元年（1457）の頃に移建されたと伝える。寺伝によれば、移建当時は関宿城内の裏御門内に建築され、近世前期の明暦3年（1657）に当時の城主であった板倉氏の命により、現在の地に再移建されたと伝えられている。この寺伝が確かなものであるならば、正保4年（1647）から明暦元年（1655）の間に描かれたと想定されている『正保城絵図』の時点では、実相寺は未だ城内にあり、**A**の現在地には存在していなかったこととなる。

そこで注目すべきは、広い実相寺境内の南端に、境内を共有するような形で、「不動堂」と地元で呼ばれる小堂が所在している。本来的には、実相寺と参道を異にする真言宗の「常福院」であり、現在では、同宗に属する近隣の昌福寺の下河辺氏が法要をおこない、台町の中下町が管理をおこなっている。

以上のように、『正保城絵図』の台町の南端に描かれた**A**の寺屋敷を、梁田氏の本拠である水海の地から移建された由緒ある現存の実相寺であると速断することには慎重である必要があり、「不動堂」と通称されている隣接する真言宗「常福寺」の来歴を、さらに詳細に調査する必要がある。



写真1 台町の実相寺



写真2 境町の実台寺

B 同じく町外れの南西に位置する大龍寺は、浄土宗の寺院で、戦国末期の天正6年（1578）に幡随意上人の開山によるものと伝える。また、大龍寺のすぐ北西の位置に、明治27年（1894）に利根川対岸の境町に移転するまで、日蓮宗の「実台寺」が所在していた。実台寺（写真2）は、寺伝によれば、永享元年（1429）に日親上人の開山によると伝えられている。現在では、寺跡は関宿小学校の校地として利用されている。『正保城絵図』に描かれた**B**の寺屋敷もまた、大龍寺のみを描いたものか、大龍寺と実台寺の両寺をひと区画として描いたものか、速断しかねる現状にある。

C 台町の中央西側に位置する宗英寺（写真3）は、曹洞宗の寺院で、北条氏滅亡後に入城した松平康元が慶長元年（1596）年に創建したと伝えられている。なお、境内に古河公方・足利晴

氏の墓と伝える石塔（写真4）が存在するが、様々な石塔を寄せ集めたものと判断され、慎重な取り扱いが必要である。

台町の街道から宗英寺までは長い参道をなし、周辺の田畑に比べれば、境内全体が数mの高さを有して、島のような景観を呈している。江戸時代まで、江戸川の堤防の決壊と水害が多かったために、喜多村家を中心とする檀家の村人たちが、境内を「水塚（みづか）」のように高く築き上げたものである。



写真3 台町の宗英寺



写真4 北条春氏の墓



写真5 会田家の墓石

なお、宗英寺の裏の墓地には、戦国期以来、梁田氏膝下の関宿の有力な町人頭であり、商人頭でもあったと考えられる会田家（写真5）などの近世初頭以来の古い墓石が散見される。

D 搦手門の四つ角のすぐ南西に位置する昌福寺（写真6）は、真言宗の寺院で、先の実相寺と同じく、梁田氏の本拠であった水海の地から、梁田氏の関宿進出に伴って永享年間（1457～1459）に移建され、寺伝によれば、水海の地に天長5年（828）に創建された古い由緒を有する寺院である。明治26年（1893）の火災により伽藍も灰燼に帰し、無住の時代が続いたが、昭和34年に江戸町の不動院との合併により、現在の寺観を呈するに至った。鎌倉公方の御料所として広大な荘域を有していた下総国下河辺荘において、鎌倉以来、荘司を務めてきた^{しもこうべ}下河辺氏（水海流）が、現在のご住職を務めている。



写真6 台町の昌福寺



写真7 昌福寺境内の宝篋院塔

なお、境内を入ったすぐ右手には、かつて江戸町の下宿に所在していた真言宗の不動院の不動堂が移築されており、境内には中世まで遡る可能性のある約20cm四方の宝篋印塔の笠（写真7）が、江戸期の新しい宝篋印塔の上に積まれている。

E 搦手門の南西に、昌福寺と道を挟んで広大な寺院が描かれているが、現在、この地域に相当する大きな寺院は存在していないが、昌福寺の北西に現存している薬師堂に相当する可能性があるものと想定しておきたい。薬師堂の法要は昌福寺の下河辺氏が務めているが、管理は台町の上町がおこなっている。

以上のように、台町に所在していた7か寺の創建の年代を検討した結果、小田原落城（天正18年・1590）以前の中世に、その創建年代と所在が確実に遡れる可能性が高い寺院は、**B**の大龍寺（浄土宗）・実台寺（日蓮宗）と、**D**の昌福寺（真言宗）の3か寺のみである。しかも、この3か寺は、台町の町並みの中に当初から組み込まれた場所に位置している訳ではなく、町外れと町の入り口の裏に立地しているのである。言い換えれば、中世以来の「台宿」に由来する近世の「台町」は、当初から梁田氏所縁の寺院を町並みに組み込んだ計画的な町割りになされたとは思われず、搦手から一直線に延びる街道に沿って典型的な短冊型の町屋が建設され、台宿の整備（完成）後に、梁田氏所縁の寺院が「台宿（台町）」の周辺部に移転してきたと理解する方が、より実態に近いと思われる。

なお、上記の諸寺院の他に、諸社も鎮座しているが、台町の鎮守社と位置付けられているのは香取神社である。『関宿町誌』によれば、慶長20年（1615）の創建と記されているが、すでに戦国期末に建設・整備され、城下町として成立・成熟していた台宿の鎮守社にあたる神社が創建されていなかったとは考えがたく、香取神社の創建は戦国期に遡る可能性があり、棟札や関連史料の発見など、さらに慎重な再検討が必要であろう。

II-2-2 江戸町

『正保城絵図』には、関宿城の大手門の正面に、東西に細長い江戸町が描かれている。上記の台宿（台町）とは異なり、江戸町は中世以来の古い由緒を有する町人町ではなく、小田原落城後に建設された新しい城下町である。江戸町の名主を務め、中世文書を有する関宿有数の旧家である会田家の『寛政元年懐中諸用之覚』（1789）¹³⁾では、「当町始り慶長八卯年元町より出ル」と記されている。中世以来の由緒を有して、およそ2km南に位置する元町（と内町）から一部の町人たちが移住して、慶長8年（1603）に近世の関宿城下町として新たに建設・整備されたものであることが判明する。

ただし、その際に、元町と内町から中世以来の由緒ある寺社も移建されており、台町の例に準じて、『正保城絵図』に描かれている寺屋敷の由緒の一端を、東から順次簡略に述べておきたい。

F 江戸町の東南隅に位置する清信寺は、浄土宗の寺院で、城主の牧野信成が慶安元年（1648）に創建した新しい寺院である。ただし、もとは見樹寺と言う古い寺院であったとの伝承もあるが、火災によって現在は廃寺となっている。

G 同じく江戸町の東南に位置する不動院は、真言宗の寺院で、不動堂は台町の昌福寺の境内に移建されている。移転先の昌福寺の自伝では、江戸後期の文化年間（1804～1818）に隆泰比丘が不動堂を建立し、関宿藩の祈願所となっていたと伝えているが、近世前期の『正保城絵図』に

描かれている寺屋敷との異同や連続性は不詳である。

H 近世の関宿城の大手門の正面に位置した福寿院は、真言宗の寺院で、現在は台町に移転している。福寿院の寺名は、大永5年(1525)の「平須賀宝聖寺末寺帳」にその名がすでに記載されており、寺伝によれば、永池上人によって15世紀の中頃に開山・創建されたと伝える真言宗の寺院である。昭和31年、江戸川と堤防の拡張工事により、台町の現在地に移建された。

『正保城絵図』に描かれているIとJの寺屋敷に関しては、具体的な寺名や由緒などは目下は不明である。今後の調査に期待したい。

なお、台町と同じく、江戸町にも香取神社が鎮座し、『関宿町誌』には慶長20年(1615)の創建と記載されている。境内の摂社に八坂神社(旧天王社)があり、天王社の夏祭りの賑やかさは『関宿土産』に描かれている。ただし、慶長20年の創建と伝えながら、同年3月付けの松平忠良の寄進状写が残されており、香取社に6石が寄進されている。同年12月には、戦国期以来、梁田氏との由緒を有する福寿院に10石が寄進されており、香取社の創建も戦国期に遡る可能性が高いと判断される。

II-2-3 元町・内町あじろじやく(旧網代宿)

『正保城絵図』の南には、関宿城と大手門の前に新たに建設された江戸町から、田畠を隔てて、およそ2kmの位置に町場が描かれている。東西に長いこの町場が、関宿城下町のひとつをなす元町と内町である。ただし、元町と内町の町名は、中世の文書には記されておらず、戦国時代から近世初頭の慶長年間までは、江戸川で隔てられた現在の幸手市の西関宿と一体で、「網代(宿)」と呼ばれていたと想定される。以下に、その論証を述べることにしたい。

まず第1に、『正保城絵図』では、関宿城の南域に描かれた元町と内町の町並みは、近世前期の寛永年間に新たに掘削された「江戸川」に沿って、南北に細長く緩く曲線を描く「町」と、江戸川に直行する4区画の「足軽屋敷」と、南の外れにひと区画の「寺屋敷」(K)が描かれている。

江戸川が寛永年間に新たに掘られて通水する以前は、関宿の元町・内町と、幸手市の西関宿とは一体の町場をなしており、「網代(宿)」と呼ばれ、中世以来の由緒を有する総寧寺・雲国寺・吉祥寺などの寺社が所在していた。

網代の地は、本来、梁田氏の支配領域ではなく、梁田氏と同じく古河公方の重臣であった野田氏の知行地であった。梁田氏が北条氏に破れた後に作成された天正2年(1574)の「知行割目目録」¹⁴⁾にも、「網代 野田」と明記されている。関宿の城を手に入れた北条氏政は、権現堂川と庄内古川により近い網代の地を再開発・整備するために、天正3年(1575)に曹洞宗の総寧寺を「網代之地」に創建することを命じている¹⁵⁾。この時点では、いまだ「網代宿」とは記されてはおらず、成熟した「宿」の形成を未だ見ていなかった可能性が高い。

北条氏の命によって創建された総寧寺の位置は、江戸川の川向かいの西関宿の小字「寺の内」の地であり、現在も、臨川庵と言う小庵が残されている(写真8)。総寧寺が創建された地は低湿地であり、度々洪水の被害にあったため、元和3年(1617)に元町の地に移転したが、洪水の被害は止まず、寛文3年(1663)に市川市のこうのだい国府台に再移転して現在に至っている。したがって、『正保城絵図』の南域に描かれている規模の大きな「寺屋敷」(図1のK)は、市川市の国府台に移転前の総寧寺である可能性もあるが、下記の雲国寺と吉祥寺である可能性もあり、目下は、特

定の一か寺に特定できない。

なお、従来は注目されていないが、現在の元町の域内には、「阿代（あじろ）」の小字が残されていることを確認・明記しておきたい。現在、雲国寺の所在する一帯が、小字「阿代」である。新井氏の想定されている網代宿の地と一部重なるが、今日の元町・内町の地から、江戸川の掘削によって隔てられる以前の西関宿にかけての広い地域一帯が、戦国期から近世初頭には「網代（宿）」と呼ばれていたと想定しておきたい。

『総寧寺縁起』には「口碑によれば、今の元町より吉田村上宇和田に亘り網代町と云う。」と記されており、上記に想定した広い地域一帯が「網代（宿）」と呼ばれていたことを傍証する、貴重な寺伝であると判断される。なお、史料の上で「網代宿」の文言が登場するのは、管見の範囲では、北条氏が関宿を手に入れて3年後の天正5年（1577）の文書が初見であり、「網代」の地名が記された最後の史料は慶長20年（1615）のものである。

現在、元町と内町には、時宗の吉祥寺（写真9）と浄土真宗の雲国寺（写真10）が所在している。まず、吉祥寺は、鎌倉後期の永仁3年（1295）に真教によって、梁田氏本拠の水海の地に創建され、梁田氏の関宿進出に伴って移転したと伝えられ、水海の地にも同名の吉祥寺が残されている。次に、真宗の雲国寺は、寛正5年（1464）に当時の関宿の領主であった佐竹刑部大輔義経によって創建されたとの寺伝を有している。梁田氏入部以前の関宿の地が、誰の領地であったかを明記した確実な関連史料は残されておらず、これまでは、関連する状況などから、佐竹氏から梁田氏に譲られたのではないかと想定がなされていたが、それを傍証する可能性がある唯一の寺伝であることを述べておきたい。



写真8 西関宿の臨川庵



写真9 元町の吉祥寺



写真10 元町の雲国寺

小字「阿代（あじろ）」の地に創建されて現存する雲国寺に対して、吉祥寺はその西側に対面するように創建されて所在していたが、江戸川の河川敷の拡張と堤防工事のために、500mほど東南に位置する現在地に移築されている。『正保城絵図』に描かれた元町・内町の南端に描かれた大きな「寺屋敷」（K）の区画は、街道を挟んで対面して建立されていた中世以来の由緒ある吉祥寺と雲国寺である可能性が高い。『正保城絵図』が描かれた時点においては、寛文3年（1663）に市

川市の国府台に移転する前の総寧寺も所在していたはずであり、吉祥寺・雲国寺との位置関係は不明ながら、元町に所在していたと伝えられている。

なお、元町と内町には、鎮守として香取神社と神明神社が鎮座しているが、両神社ともに、その創建は戦国期に遡るものであると想定される。

Ⅲ 戦国期の関宿城下町の実像

Ⅲ-1 城下の全体像―「三戸張^{とばり}」と「新宿^{あらじゅく}」―

関宿の戦国期の城下町の全体像を描ける関連史料は存在しておらず、永禄8年（1565）3月に北条氏康が関宿城を攻撃した第1次関宿合戦の折り、攻撃した側の足利義氏は「内外宿迄無一字焼払之由、」と書状に認めており¹⁶⁾、関宿の城下が、主に家臣たちが居住する城内の「内宿」と、町人たちが居住する城外の「外宿」すなわち「台宿」から構成されていたことが判明する。

これに対して、攻撃され側の梁田晴助は、佐竹義重に対して「午刻、氏康父子取手鎧被寄来之間、宿之内之引入、大戸張・小戸張・新曲輪、自三戸張切而出、新宿迄払出候、敵手負・死人数多候条、用害廻に不取陣、取号中戸所、五里計引除陣取之間、」とのより詳細な書状を認めている¹⁷⁾。この書状の中で、とくに留意すべきは、北条氏の攻撃を受けた梁田氏が、「大戸張・小戸張・新曲輪」と呼ばれた関宿城の防御最前線の「三戸張」より切り出して、敗走する北条軍を追って「新宿」まで払い出たことである。

これまでの諸研究では、この「新宿」に対して、様々な理解がなされ、市村氏は関宿城の南約2kmに位置する内町・元町（もとの網代）に比定されるなど、一致した見解を有していなかった。本稿では、従来とはまったく異なる、より当時の戦況に適する一案を提示することとしたい。すなわち、反撃する梁田軍の前に、敗走する北条軍は松戸の小金城から関宿城に通じる街道を退くと理解することが順当であると考えられる。そのように素直に理解した上で地図を眺めると、焼き払われた関宿城下の町外れの台宿の木戸口の南およそ2里（8km）余の位置に、中世の文書にも記載される「木間ヶ瀬^{きまがせ}」（中世には「木間ヶ洲^す」と表記）の村があり、古い街道筋に面する位置に、その名も「新宿（あらじゅく）」と呼ばれる地区が現存する（写真11）。

梁田軍が、敗走する北条軍を追って、2里（8km）余も深追いするのかとの疑問も出てこようが、以下のふたつの点からも、上記の文書に記された「新宿」が、現在の野田市木間ヶ瀬の「新宿」に相当すると考えられる。理由の第1は、上記の文書の後半に、新宿まで2里余も北条軍を追った梁田軍は、少しばかり引き戻り、関宿城下により近



写真11 木間ヶ瀬の新宿



写真12 中戸

い（3km程）街道筋に位置する「中戸」^{なかと}に陣を張ったのである。この「中戸（なかと）」も関宿城から木間ヶ瀬に至る街道筋の中間に、集落・地名として現存しており（写真12）、文書に記された戦況にすべて適合していると判断される。なお、中戸には、鎌倉後期の弘安7（1284）に、親鸞の末娘である覚信尼の第2子の唯善が、東国に下行した折りに創建された由緒を伝える、浄土真宗本願寺派の関東七大寺の一寺でもある常敬寺が所在している。

文書中の「新宿」を、野田市木間ヶ瀬の「新宿（あらじゅく）」に比定する第2の傍証状況は、天正11年（1583）のものとして想定されている、足利義氏遺臣等連署書状写（喜連川家文書）によれば、第3次関宿合戦で関宿城を手に入れた北条氏の足軽が「木間ヶ洲」に居住しており、足利軍から奪い取った荷物や馬・人夫などを返還せず、その返還をめぐって両者の間で書状を交換して揉めている¹⁸⁾。すなわち、戦国期の関宿城から2里余もの距離を有する「木間ヶ洲」ではあるが、関宿城に属する「木間ヶ洲御足軽」が居住していたことが確認できるのであり、その「木間ヶ洲」域内の街道筋に位置する「新宿（あらじゅく）」が当時から存在していたことを妨げるものではない。

以上のように、これまで諸説が出されて統一した見解がなかった「新宿」の位置を、古い街道筋に面する現在の野田市木間ヶ瀬（戦国期は木間ヶ洲）の「新宿（あらじゅく）」に比定して大過ないものと判断されよう（図2）。逆に言えば、木間ヶ洲に関宿城の足軽衆が居住していたことからすれば、広義の関宿城下町の一端の役割を担っていたと理解しておく必要もあろう。近世の城下町のように、コンパクトにまとまった城下町のイメージで、戦国期の関宿城の城下町を理解するのではなく、広範な田畠も含み込んだ、広域な城下の実像をさらに詳細に復原したいと念じている。



図2 戦国期の関宿城下とその周辺

Ⅲ-2 定期市の創設と移転

関宿の城下では、さらなる繁栄を祈願して、天正15年（1587）に市神である愛宕堂の建立と定期市の開催を領主である北条氏に願い出て許可されている。

史料3 天正15年（1587）北条氏政印判状写

掟

右、関宿ニ愛宕堂建立、来八月廿四日市を可立由、不可有相違、惣別関宿 宿中之儀者、任町人不入之定ニ候間、横合非分之様ニ、両代官談可致之者也、仍如件、

天正十五年丁亥

奉之

七月六日

海保

関宿

町人中

この書状¹⁹⁾は、領主である北条氏政が、天正2年（1574）の第3次関宿合戦によってようやく手に入れた関宿城下の町人中に対して発給した印判状である。実質的には、関宿の町人らが市神である愛宕堂の建立を建立し、その場で来る8月24日に市を立てることを願いでたのに対して、許可を与えたものである。

関宿に関するこれまでの研究に際しては、愛宕堂建立と市立てに関するこの史料も度々引用・言及されながら、愛宕堂が建立され、市が開催された具体的な場を比定した研究は、管見の範囲においては見当たらないようである。

まず、愛宕堂を建立し、市を立てて町場の繁栄をはかろうとしたのは、関宿の城下に古くから成立していた「台宿^{だいじゅく}」であったのか、それとも、天正3年（1575）の総寧寺建立を契機として町場の成立と形成をみた、成熟途上の新しい「網代宿^{あじろじゅく}」（現在の元町・内町から西関宿一帯）であったのか。解釈の分かれるところであろうし、上記の印判状写には具体的な場所は記されていない。

かつての台宿と網代宿の地にあたる、現在の台町と元町・内町の小字名を旧関宿町役場（現・いちいのホール）において調査すると、元町に「愛宕前」の小字名が残されていることが確認できる²⁰⁾。元町は戦国末期において、北条氏によって新たに整備がなされた「網代宿」の地であり、その整備と繁栄の一貫として、網代宿の町人たちが市神である愛宕堂の建立と市の開催を願い出でたものと判断される。

元町の小字「愛宕前」の現地を訪れると、元町の鎮守社である香取神社の北側一帯であることが判明する。現地には、元町の集落内をはしる細い街道から、香取神社と鳥居が見て取れる。愛宕堂は、その香取神社の北隣に、寄り添うように建っている（写真13）。香取神社に比べれば、方一間ほどの小さなお堂であり、地元の方に伺わないと由緒ある愛宕堂とは気付かず、見過ごしてしまいそうである。地元の方のご教示²¹⁾のとおり、小堂の前に高さ1mほどの石灯籠が一基建っており、近世の寛政3年（1781）の年号と、「奉納愛宕山大権現」の文字が確かに刻まれている（写真14）。明治以後における江戸川の河川敷の拡張工事と、それに伴う堤防工事によって、香取神社と愛宕堂は、本来の位置よりも数十m東に移築されたとのことであるが、大幅な改変は受



写真13 元町の愛宕堂（右側の小堂）



写真14 愛宕堂の石灯籠

けていないと判断される。

したがって、町人の願いによって天正18年（1587）に建立された「関宿の愛宕堂」の位置は、戦国期以来すでに整備されていた台宿ではなく、北条氏によって天正年間以後に新たに建設と整備が開始された、網代宿の地、それも、鎮守社である香取神社の境内であることが判明した。この香取社の境内とその門前一带において、関宿の定期市が開催されたと想定される（図3）。

ただし、近世になって新たに江戸町が建設・整備された後も、この愛宕堂の前で定期市が引き続いて開催されたか否かについては、目下は、不詳である。江戸時代に描かれた関宿城下町の絵図には、江戸町の東北隅に東正院と言う寺院が描かれ、その境内摂社のようにして愛宕社が描かれている。

元町に残されている戦国期以来の由緒を有する愛宕堂と、近世の城下絵図に描かれた江戸町の愛宕堂（図4）を併存を合理的に理解するには、戦国期に元町（当時の網代宿）に創建された市神としての愛宕堂は、近世初頭になされた関宿城の江戸町の建設にあたり、移建された可能性が高いと想定されよう。それを裏付ける傍証として、江戸町の北東隅に建立されて愛宕堂を管理していた東正院は、本山派修験の山伏であった。山伏の手によって市神が管理され、定期市の開催に当たり、「市場之祭文」や「連雀之大事」のような、市の繁栄を祈願する祭文が山伏らによって奉読されていたことは、すでに多くの研究によって明らかにされている。関東において、市神としては（牛頭）天王がやや多いように見受けられるが、関宿の近辺の市場においても、水海道・石下や間々田などが愛宕を市神として勧請しており、希有の事例と言う訳ではない。



図3 元町の愛宕社（香取神社の北隣の●の位置）

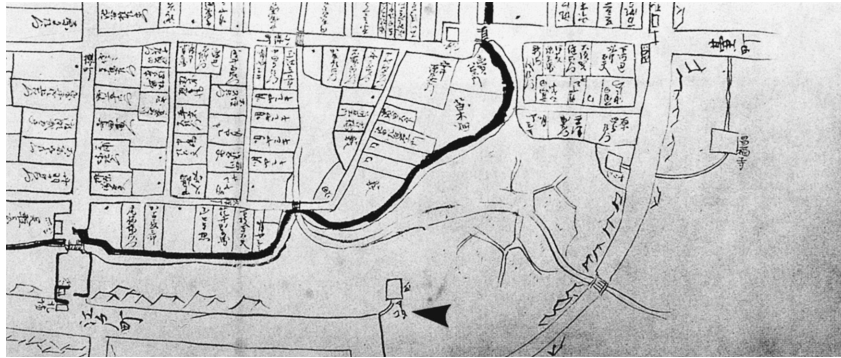


図4 近世の江戸町の愛宕社（絵図中央下の矢印が「アタコ」社）

以上のように、天正15年（1587）に勧請・市立てがなされたのは、北条氏によって新たに整備されつつあった「網代宿」の地であった。江戸町の伝承によれば、江戸町は慶長8年（1603）年に元町（すなわち網代宿）から分出して形成された新たな町であると認識されていた。この伝承に基づけば、網代宿の繁栄を願って建立・市立てがなされた愛宕堂も、わずか16年ほどで新設の江戸町に分祀されたことになる。

なお、江戸町の北東隅に所在して修験が管理した東正院もすでに現存しておらず、高さ1mほどの愛宕社の小社のみが、高橋氏の自宅裏にかつて存在していた。その愛宕社の小社も老朽化のために取り壊され、愛宕神は東へ100mほどの地に位置する八幡神社（写真15）に合祀されている。



写真15 江戸町の八幡神社（愛宕社を合祀）

Ⅲ-3 吉祥寺と「時の太鼓」

現在の元町（戦国期は網代宿）に所在する時宗の吉祥寺に宛てて、かつては、以下のような北条氏の印判状の写しが数通残されていた。上記に延べたように、次の文書が発給された時点の吉祥寺は、今の所在地ではなく、現在の雲国寺の西側に建っていた。

史料4 天正3年（1575）北条氏印判状写

- 一 四貫二百文 大鼓堂香油錢
- 一 三貫文 給
- 一 貳貫四百文 二人扶持

右、亥年給・扶持并香油錢被下候、佐枝・恒岡前より可請取者也、仍如件、

天正三年乙亥

十一月十九日

吉祥寺

本史料²²⁾は、第3次関宿合戦を経て、ようやくに関宿城を手に入れた北条氏が、その翌年に、城下の吉祥寺に対して、4貫200文の太鼓堂香油銭や2貫400文の2人扶持（料）などを、佐枝・恒岡の両名から受け取るように命じたものである。受け取り先の佐枝と恒岡は、両名ともに北条氏が支配していた岩付城の蔵奉行の、佐枝信宗と恒岡資宗である。

北条氏が吉祥寺に給した「大鼓堂香油銭」は、関宿の城下に朝夕の時を告げる「時の鐘」に相当する、戦国期の「時の太鼓」にあたると想定したい。関宿城を手に入れた翌年に、北条氏は、城下の時も支配下に置いたと理解される。

ほぼ同文の印判状が吉祥寺に対して毎年出されており、北条氏が城下の時を支配していたものと理解できよう。北条氏の滅亡の後、歴代の城主によって吉祥寺に同様の給付の書状が出されている。とくに、慶長7年（1602）の松平康元証状写によれば、「関宿御城六時之大鼓役、（中略）、於其郷中名主定使ニ可被申付候、夏秋両毛無家闕可出之旨、依被仰出状如件、」と記されている。前代の北条氏の時代には、隣接する岩付城の蔵奉行から「大鼓堂香油銭」などの扶持が吉祥寺に給付されていたが、北条氏の滅亡後に関宿に入部した新たな領主である松平氏は、一括給付のかたちを取らず、吉祥寺の寺僧たちが、秋と秋の収穫時期に関宿領内の村々を廻り、その勸進物を得ることが許可されている。給付の形態は変化をとげつつも、関宿城下の「時の太鼓」を由緒ある時宗寺院である吉祥寺が、一貫してたたいていたことを確認しうる。

関宿城下における時の支配が大きく変化をとげたのは、寛永17年に2万3千石の領主として入部した北条氏重の代である。氏重は、城内に鐘が無いことを憂え、翌18年（1641）に関宿城の「時の鐘」を新鑄し、その鐘を楼門に掛けて、戦国期以来の「時の太鼓」ではなく、新たな近世の時代の到来を告げる「時の鐘」の音を城下に響かせたのである。寛文9年（1669）に入部した久世広之は、城内の北西に三階増楼を新築し、破損していた旧鐘を改鑄し、同年の9月吉日の銘を有する時の鐘を城下に再度響かせた。

関宿の城内に「時の鐘」が響くこととなった寛永18年（1641）以後、戦国期以来、関宿の城下に時を告げてきた吉祥寺の「時の太鼓」の音が止まった（止められた）のか否か、関連の史料が残されておらず、詳細は不詳である。

Ⅲ-4 有力町人の居住地

これまでの諸研究においては、戦国期の関宿城下の「台宿」と「網代宿」に居住していた有力町人に関しては、戦国期以来の文書を所有してきた会田家を中心にべられてきた。周知のように、戦国期末から近世初頭の関宿城下には、会田氏をはじめとする複数の有力な町人たちが居住していたことが確認できる。

史料5 慶長8年（1603）松平康元定書写

- 一 諸役不入之事
- 一 穀町之外脇ニ而売買致間敷事
- （ 中 略 ）

右、卯年正月從十一日七年不入取定之、仍如件

下総国関宿城下町に関する歴史地理学的研究

慶長八卯年
十二月廿六日

合田大膳
知久彦右衛門
倉持彦兵衛
大屋弥八郎
寺島孫七郎
下津屋甚五郎

史料6 天正17年(1589) 北条氏政印判状写

台宿之町人と相定上、網代居住悪候、自身者来月廿日を切而台宿へ可罷移候、仍如件

天正十七年己丑
卯月廿七日
寺島大学とのへ
大谷内匠助とのへ

上記の史料5²³⁾は、関宿城主の松平康元が、合田(会田)大膳をはじめとする関宿城下に居住する有力町人宛てに出した定書であるが、彼らが戦国期以来の由緒を有する「台宿(台町)」に居住していたのか、近世初頭の城下町整備に際して新たに建設された「江戸町」に居住していたのかは記されておらず、文書の上からは彼らの居住地は不詳である。ただし、記載されている会田氏をはじめとする諸氏は、城下に居住していた単なる有力町人ではなく、歴代の領主から「掃部助」などの官途名を受ける武士でもあり、戦国期末から近世初頭の「台宿」と「江戸町(かつての網代宿)」を代表する商人頭(町人頭)たちであったと判断される。

史料5に記された有力商人6人の内、寺島氏と大谷氏の両氏は、本来は網代宿に居住していたが、領主である北条氏から台宿の町人と定められ、来る5月20日までに台宿へ移住することを命じられている。同様の移住命令は、他の有力諸氏にも出され、網代宿から台宿へ移住したことを伝えている。すなわち、台町の名主や組頭を勤めた横田家の家伝によれば、上記の史料6²⁴⁾の移住命令が出された天正17年(1589)正月に、同家の先祖である横田左衛門佐が、網代より台宿に移住したと伝えている²⁵⁾。

史料5に記された関宿の有力な6家の内、会田家は近世初頭に建設された江戸町に移住し、名主役と日光東街道の本陣役を永らく勤め、江戸川の拡幅と堤防工事のために、旧居を離れて台町に現住されている。近年、永らく不明であった会田家文書の原本の大半が同家から再発見され、関宿城博物館の紀要にて新井氏が紹介・報告されている²⁶⁾。新井氏はまた、下津屋(現・下津谷)氏が現在も幸手市の西関宿に居住されていることを報告されている。

残る大屋(大谷)氏・倉持氏・寺島氏・知久氏についても、従来の研究では十分述べられていないため、現状の一端を順次述べておきたい。

大屋(大谷)氏は、台町の上町西側に居住していたが、現在は他出され、その屋敷跡には稲子氏が居住されている。

倉持氏は、大谷氏と同じく、台町の上町西側に現在も居住されている。

寺島氏は、台町の下町東側に現在も居住されている。

知久氏は、関宿から他出され、野田市の中央部に居住されているとのことである。関宿での旧居の位置は、目下は不詳である。

以上のように、戦国期末から近世初頭の関宿を代表する6人の町人頭（商人頭）のうち、5人の旧居の位置がほぼ判明した（図1の●）。

Ⅳ 近世前期の関宿城下町周辺の状況

Ⅳ-1 「下総之国図」の信頼度

近世初頭から前期における関宿城下町とその周辺地域の復原と検討を行なう場合、避けて通れないものが次の3枚の古絵図である。1枚目は、『幸手市史』の編纂の過程で新井氏らによって再発見・紹介され、近世初頭の景観が描かれている可能性が高いと評価されて、各地の博物館などにおいて展示されている船橋西図書館所蔵の「下総之国図」である。2枚目は、寛永10年（1633）の幕府巡見使に提出されたと考えられている国絵図の略図であり、秋田県立公文書館所蔵の「日本六十余国々切絵図」をはじめとして、山口県立文書館の毛利文庫や岡山大学図書館の池田家文庫などに残されており、池田家文庫の国絵図は柏書房からカラー図版で刊行され、研究に多大の便宜を与えている。3枚目は、幕府に上納された下総国の「正保国絵図」であり、写しが（独）国立公文書館の内閣文庫に伝えられている。

上記の3枚の古絵図に関しては、すでに千鳥絵里氏が詳細なトレース図を作成し、復原と検討を加えている。千鳥氏の研究²⁷⁾は、近世初頭の景観が描かれているものであるとの評価が定まりつつある「下総之国図」を対象として、本格的に検討を加えたはじめての研究である。

本稿では、千鳥氏の検討と新井氏が作成されたトレース図（略図）を援用させていただきつつ、別の角度から、関宿城と周辺地域に関する再検討をおこなうこととしたい。

まず、「下総之国図」（図5）に関しては、関宿城が描かれ、城を取り巻くように、現在の流路に近い権現堂川～逆川～（中）利根川が明確に描かれている。とくに、逆川が関宿城の西側に描かれており、この絵図を信じる限りにおいては、この国絵図が描かれた段階で、上記の正保の関宿の城絵図で検討を加えた、城の本丸と二の丸との間を流れていた利根古河がすでに閉じられて、城の西側を流れる現在の逆川が掘削・拡張されて流れていたと理解することとなるのか。

また、関宿城から東南に位置する高城氏の小金城との間に、平行して2本の街道が引かれている。右側の

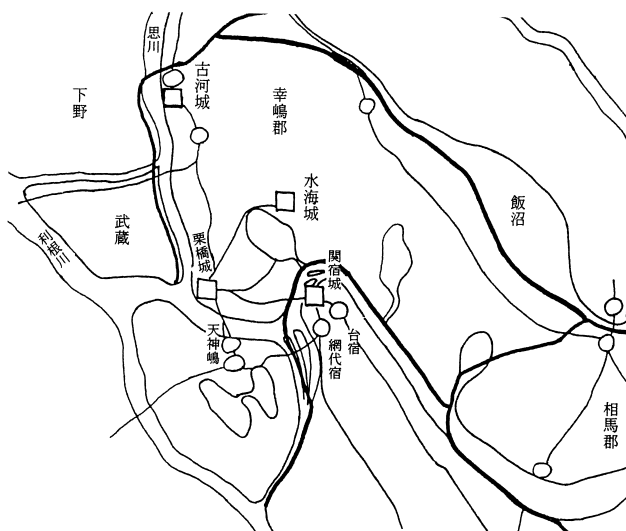


図5 『下総之国図』のトレース図（新井氏作成・部分）

街道が近世の日光東街道にほぼ相当する街道であり、関宿城のすぐ右下には「台宿」と読むことも或いは可能な村型と地名が表記されている。平行して左側（西側）をはしる街道は、現在の江戸川が寛永年間に掘削された流路の位置にほぼあたり、その掘削のために街道が結果として無くなったとの理解も可能であろう。とくに留意すべきは、関宿城のすぐ南にその街道に沿って「網代宿」が記載されている事実である。すでに述べたように、網代宿は第3次関宿合戦の後に、北条氏が城下町として新規に整備した戦国期末の城下町であり、近世初頭に入部した松平氏は新たに江戸町を建設・整備し、管見の史料の上では、「網代（宿）」の町名は慶長20年（1615）を最後に確認できない。

したがって、戦国期の古城が多く描かれ、その古城間を結ぶ街道も描かれている「下総之国図」は、慶長年間以前の近世初頭の関宿城と周辺地域の景観が描かれた、希有の貴重な国絵図であると判断されよう。

けれども、他の視点から関宿城とその周辺地域などの景観や地名を検討した場合、近世初頭の慶長年間（1596～1615）以前の古い景観と地名のみが描かれているとは言い難い事例が描かれているのもまた事実である。すでに、千鳥氏が詳細な関連史料の博搜と検討の結果を述べているように、「下総之国図」に太く描かれている「中川」は、当時は細流のはずであり、「中川」の名称自体の確実な史料上での初見は近世中期の享保年間（1716～1736）である。また、千鳥氏は言及していないが、関宿城の周辺に、古河城をはじめとして、栗橋城や水海城など、古河公方膝下の重要な古城（跡）が描かれているが、関宿城の西に位置した、同じく古河公方の重臣であった一色氏の居城であった「幸手城」や「天神島城」などは描かれてはいない。

すでに、大谷貞夫氏も、近世初頭の景観や地名が描かれている一方で、元禄年間以後の要素も散見されるとの慎重な一文を書かれているように²⁸⁾、私も「下総之国図」は元禄年間から享保年間以後に、近世初頭から前期の関連史料を収集・検討し、復原した歴史地図である可能性が高いと考えている。

2枚目の寛永10年（1633）に幕府の巡見使に献上された「下総国図」の略図（図6）には、関宿城を取り巻くように、河川の流れが明確に描かれている。この絵図の描写に依るかぎり、寛永10年（1633）までに、関宿城の西を流れる「逆川」が掘削・整備されていたとの理解に導かれよう。

3枚目の正保年間に幕府に提出された詳細な正保の「下総国絵図」（図7）に依れば、関宿城を取り巻くように、現在の権現堂川～逆川～（中）利根川が、より明確に描かれている。さらに、寛永年間に新たに掘削された江戸川が「新川」として描かれており、その左手に「（庄内）古川」の流路も描かれている。

下総国の概要が描かれた上記の3枚の国絵図に検討を加えた結果、「下総之国図」は近世中期に描かれた歴史地図と位置付けるべきであり、寛永10年の「下総国図」は略図ながら幕府の巡見使に上納したある程度信頼に足る国絵図であり、同じく幕府に提出された正保の「下総国絵図」がもっとも詳細で、信頼に足る絵図史料であると判断される。

Ⅳ-2 「逆川」の掘削と「内利根川」・「外利根川」の認識

旧利根川水系の権現堂川と旧常陸川水系を繋ぎ、関宿城を西側から北へと取り巻いて流れる「逆川」は、どの時期に掘削または拡幅・整備されたのであろうか。

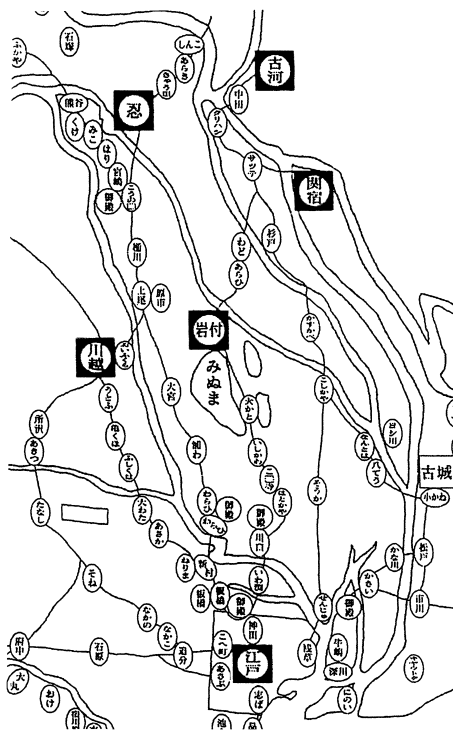


図6 『日本六十余州国々切絵図』のトレース図
(千鳥氏作成・部分)

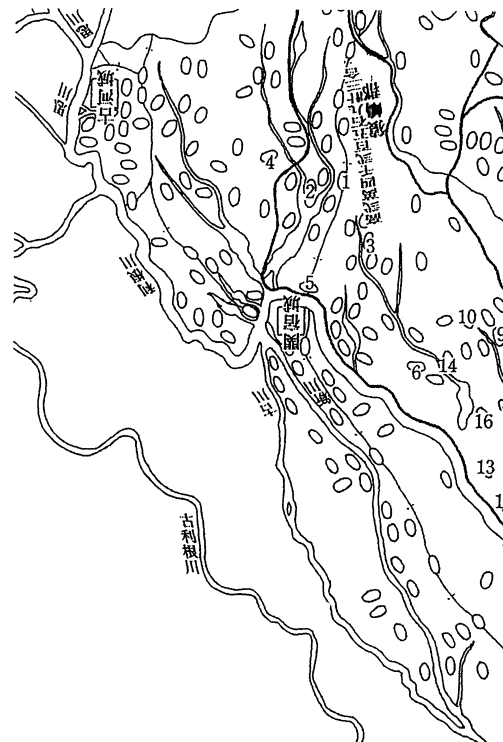


図7 『正保の下総国絵図』のトレース図
(千鳥氏作成・部分)

管見の範囲では、「逆川」と記された戦国期の関連史料は1点のみであり、天正11年（1583）のものと想定される北条氏政書状写²⁹⁾である。「逆川」の近くまで敵が来襲してきたと言う芳春院（北条氏康の妹）の報告に対して、すぐ援軍に向かう旨の返答を氏政は認めている。逆川と呼ばれる河川は、関宿城の西を流れる逆川と、埼玉県鴻巣市内の逆川の2か所がある。この書状が認められた前年の天正10年（1582）に古河公方・足利義氏が死去しており、援軍を求めた芳春院は義氏の娘である氏姫のもとで、古河城の守りを固めていたと想定される。この場合の「逆川」を、両者いずれの「逆川」か確定することはむずかしいが、関宿城を取り巻く「逆川」である可能性が有ることは述べておきたい。この場合は、細流ながらも「逆川」と呼ばれる河川が戦国期の末にすでに流れていたこととなろう。

次に注目すべきは、五霞村元栗橋の松本好司家文書に記された近世の記録である。すなわち、「寛永十一年亥年権現堂川之下流上宇和田村三田村方北西江掘曲仕、関宿城下江戸町地先字四ツ谷と申処ヲ相決、今之江川村与申所へ相懸かり外刀祢川と相会シ、」との伝承が記載されている。この史料³⁰⁾は、すでに諸論文に引用されており、猪股 寛氏は寛永11年（1634）に「逆川」が掘削されたことを傍証する関連史料である可能性を述べている。先に検討を加えたように、前年の寛永10年（1633）に、幕府の巡見使に献上された下総国の略絵図には、関宿城の西側を取り巻く「逆川」がすでに描かれており、齟齬をきたすこととなる。ただし、上記の松本家文書に記された河川掘削の位置は、関宿城の西側を取り巻いて流れる「逆川」に相当することもまた事実である。上記の記事をもって直接に「逆川」が寛永11年に新規に掘削されたと読むことはできないが、もと

より存在していた細流の「逆川」の流れを整備するために、さらに拡幅・整備したと読むことも不可能ではない。

また、猪股氏³¹⁾も言及されているように、上記の史料の末尾に「外刀祢川」と言う表記が記されている。猪股氏は、当時の人々が「内利根川」と「外利根川」に呼び分けていたことをやや否定的にとらえているが、他の利根川の関連史料にも「内利根川」と「外利根川」の表記と書き分けがなされている。未だ確定的な史料を得ている訳ではないが、旧利根川水系（庄内古川～江戸川下流水系）を「内利根川」と理解し、新たに掘削され、関宿城下を銚子方面に流れ下るようになった水流を「外利根川」と当時の人々が呼び分けていた可能性が十分残されていることを述べておきたい。

V まとめにかえて

本稿は、新井浩文氏と長塚 孝氏の研究をはじめとして、佐藤博信氏と市村高男氏・阿部浩一氏・猪股 寛氏・内山俊身氏などの諸研究に多くを学びながら、戦国期から近世前期に至る関宿城下町に関する諸問題について、若干の復原と検討を加えたものである。

本稿はこれまで論じてきたように、関宿城下町について、歴史地理学の立場から、上記の諸氏の研究に導かれ、基礎的な復原と検討をおこなったものであり、未だ、まとまった結論を導き出したものではない。したがって、ここでは、本稿でおこなった復原と検討で得たささやかな成果を再述することはせず、さらに残されることとなった課題について述べておきたいと思う。

残されている課題の第1は、関宿城下の景観を一変させ、内陸水運とそれに伴う物資輸送の便宜を与えた、「利根川」と「逆川」掘削（東遷）の時期を確定させる関連史料を発掘することである。本稿では、関宿城下の利根川の掘削を天文年中（1532～1555）と伝える近世の記録類を利用・紹介した。もとより、戦国期の一次史料ではないことは十分承知した上で、利用・紹介したものである。近世に記された二次史料ではあるが、「利根川」と「逆川」の掘削（東遷）を天文年中と伝える貴重な伝承が近世には存在していたことを書き残しておきたかったからである。この小論を契機として、関連する近世の伝承史料がさらに発掘・紹介されることを念じている。

課題の第2は、本稿で復原と検討を加えた関宿城下町を構成する、戦国期以来の由緒を有する台宿（現在の台町）をはじめとして、網代宿（元町・内町・西関宿）、近世に新たに建設・整備された江戸町、足軽衆が居住していた木間ヶ洲（現在の木間ヶ瀬）、利根川対岸の旧山王村と境町など、未だ十分な現地調査をおこなえていないことである。個々の町の詳細な現地調査にはなおかなりの時間が必要であり、さらに調査を継続したいと思う。

課題の第3は、課題の第2とも連動するが、各町内に居住して、各城下町の個性を形成した主人公でもある会田氏や大谷氏をはじめとする、町人頭（商人頭）の役を勤めた旧家はもとより、居住されている（いた）他の旧家の伝承（移住・もと武士などの）も丁寧にすくいあげる必要がある。

課題の第4は、本稿ではまったく検討するすこができなかったが、近世に成立した『軍記』類の利用である。とくに、『北条記』には「此城（関宿城・筆者注）、二方ハ大河ニテ、要害無双ノ処也。江戸衆・小金衆・白井ノ衆・千葉ノ家来衆ハ、皆船ニテ押寄ル。」と旧利根川水系における

水軍の活動を伝えている。従来の研究では、筆者も含めて、利根川の掘削（東遷）や、物資の輸送に便宜を与える内陸水運には注目しながら、周囲を諸河川と湿地・湖水で取り囲まれている関宿城を奪い合う合戦において、軍船が活躍していたことは自明と思われる。関宿城と水海城を本拠とする梁田氏は、水軍の棟梁としての姿も有していたと判断される。

関宿城はもとより、旧利根川水系に位置する栗橋城や古河城をはじめとする諸城においても、合戦における水軍（軍船）の評価と実態の解明を進める必要がある。水軍は里見氏や北条氏など、海に面した諸大名のみが擁していた訳ではなく、旧利根川水系と旧常陸川水系をはじめとする、内陸水系に居城する諸大名の水軍（軍船）の具体的な研究の深化が、是非とも必要である。内山氏は、第2次関宿合戦（永禄11年・1566）において、梁田氏は、敵方である北条氏の「兵船」と「船懸合」をおこない、「数刻相戦」った事実を「梁田持助感状」からすでに指摘している³²⁾。まさに、関宿城と水海城の両城を本拠としていた梁田氏は、多くの兵船を有して、利根川水系の中央を押さえる水軍の領主でもあったことを、再認識しておきたい。

注および文献

- 1) 主な論文としては、次のものがある。

市村高男（1992）中世東国における房総の位置、千葉史学、21号。

- 2) 主な論文としては、次のものがある。

阿部浩一（1995）中世後期における関東内陸の水上交通と伝馬・宿一下総国関宿を中心として一、『中世東国の物流と都市』、山川出版社。

- 3) 新井浩文（1997）中世関宿城下の宿とその機能—網代宿を中心として一、千葉県立関宿城博物館『研究報告』創刊号、同『研究報告』に関宿に関する意欲的な一連の論文を発表されている。

なお、中世の関宿城下町に関する最新の研究として、遠山成一（2006）中世関宿城の城下構造に関する一考察、千葉史学、48号、がある。

- 4) 長塚 孝（1991）後北条氏と下総関宿、『中世房総の権力と社会』、高志書院。

同 （1994）旧利根川下流域の城と町—古河・栗橋・関宿を中心として一、野田市史研究、5号。

- 5) 佐藤博信（1981）古河公方家臣梁田氏の研究、千葉大学人文研究、10号。

同 （2000）『江戸湾をめぐっての中世』、思文閣出版。他

- 6) 内山俊身（1995）戦国期梁田氏城下水海の歴史的位置—関東の二代河川流通路の結節点を考える—、そうわの文化財、4号。

- 7) 新井浩文（2002）戦国期関宿の河川と交通—船橋市西図書館蔵「下総之国図」の史料紹介を通して一、千葉県立関宿城博物館『研究報告』、6号。

- 8) 『千葉県の歴史』資料編、近世6、下総2、所収。

- 9) 猪股 寛（2003）寛永期の江戸川開鑿について、野田市史研究、14号。

- 10) 『古河市史』資料・中世編、所収。

- 11) 『幸手市史』古代・中世資料編、所収。

- 12) 小笠原長和（1985）東国史の舞台としての利根川・常陸川水脈、『中世房総の政治と文化』、吉川弘文館。

- 13) 林 保（2003）江戸町と関宿本陣会田家—会田久兵衛諸用之覚からみる江戸町—、千葉県立関宿城博物館『研究報告』、7号。

同じく関宿の城下町を形成した利根川対岸の境町に位置した河岸問屋の小松原家の正徳五年よりの『諸用留写』にも、「江戸町始り 慶長八卯年元町方出ル」との、同一の町立ての伝承を有してい

たことを記載している。

なお、江戸町のみならず、戦国期以来の伝統を有する台町にも、近世には「当町初り 天正十八年元町方出ル」との伝承が残されていた。この台町の横田家に残されていた安政五年の『台町明細書上』の伝承に基づけば、戦国期の台宿が、近世初頭に、新しい台町に再編・再整備された可能性も視野に入れておく必要がある。

- 14) 前掲11)。
- 15) 〃 。
- 16) 〃 。
- 17) 〃 。
- 18) 〃 。
- 19) 〃 。
- 20) 金子 隆氏をはじめとする、野田市民生経済部関宿支所の皆様に、大変、お世話になりました。
- 21) 内町在住の秋本義次氏より、愛宕堂についてのご教示をいただきました。現在も、毎年10月23日に愛宕堂の秋祭りが執り行われているとのことである。
- 22) 前掲11)。
- 23) 『鶯宮町史』史料三・中世、所収。
- 24) 〃 。
- 25) 前掲8)。
- 26) 新井浩文(1999) 関宿会田家文書の再検討―関宿城下有力商人会田家と網代宿―、千葉県立関宿城博物館『研究報告』、3号。
- 27) 千鳥絵里(2005)「下総之国図」に関する基礎的研究、史草(日本女子大学史学研究会)、46号。
- 28) 大谷貞夫(2002) 千葉県史研究10・別冊、房総の近世1、の口絵カラー写真(下総之国図)に対する下段のコメント参照。
- 29) 『猿島町史』資料編、原始・古代・中世、所収。
- 30) 『下総境の生活史』史料編、近世I、所収。
- 31) 前掲9)。
- 32) 前掲6)。

付 記 現地調査に際しては、地元の皆様に多くのご教示をいただきました。特に、江戸町在住で旧関宿町の生き字引である林 保先生より、誠に多くの詳細かつご丁寧なご教示をたまわりました。

また、境町の実台寺ご住職の酒井義博師と奥様と愛犬のゴン、内町在住の秋本義次氏、昌福寺ご住職の下河辺弘昭師、西関宿の吉田哲雄氏にも、多くのご教示とご配慮をたまわりました。以上、記して、心よりお礼申し上げます。

末尾ながら、小論の中で、今は忘失・現存せず、江戸時代後期に佐原の研究者である清宮秀堅翁が調査・編纂された『下総旧事』に残された関連史料を多く利用しました。その直系の子孫にあたり、第16代を継ぐ予定の清宮千紘さんが、本年度の伊藤ゼミ(歴史地理学)で、秀堅翁と『下総旧事』に関する卒業論文を書かれていることに深い縁を感じることに頻りである事を記しておきたいと思います。

拙い小論ではありますが、林 保先生と、清宮秀堅翁のご霊前に、本稿を謹んで献呈いたしたいと存じます。

(2006年11月1日記)